

雙魚堂座右錄

坤

明治四十一年十二月一日起

特別  
14  
1919  
228



176507

雙魚重府在錄

己巳年戊申五月

38- 9028

雙魚中座在好

明治三十二年十二月上旬記

口中并取以、嚼し、石、二顆、漸く、春  
刀、手、元、に、在、り、流、石、二、顆、練、二、顆、其、非  
雅、を、定、め、る、に、微、塵、を、し、り、向、又、め  
を、ま、る、朱、文、の、子、の、布、に、ま、る、凡、平、の、心  
を、取、り、し、り、ま、る、あ、ら、ま、る、架、中、の、珠  
と、ま、る、ま、る

東  
大  
家



文云

孔方兄有絶  
交書

欵云

此中  
敬少

文云

得其人信必  
子孫

白臘石

欵云

七十八  
敬不





市村をおくしと余のあり刻書せんことを  
もとむ市村白ちる余のうとを諒し刻  
書と諒し終る余の采中し。ゆし余の  
銅印書紙に、一、於て完本をのりし、此の  
下巻二冊家紙の上巻と略々作執持  
代と因りし紙の自本を志紙茶もも鹿  
紙を板紙と附せり。余の采中し板と  
御路書に、ゆりやゆり年世とて完本をの  
り終るせんをゆり没せん完本の出  
る余のち懇しいは板とるるるる  
え終る完本の一部を採ぬいふる



いしと心自ら危ぶめり。ぬる何の書に  
ゆり余の採りて終るの下巻末本に出  
余んとき、えんて天の余のありて  
このありん、紙の板紙に、余のありて、ゆり  
言ふ、ある書、此の零本の書りしと又余  
書る本の書也市村白ちる初巻のそん、  
刻書するも其の滑らるる、市村白ち  
く君、思つる代に、條件を附するそん  
見んことを終るるとせし、ゆし、ゆり  
るる、余の、余の、一、也余、  
新しと之れを、書せし、ゆり、ゆり、ゆり、

ふはめりき之を帝國天子と魂ると此  
の一書一書講に述事世心とて記つて其  
慈悲と詳叙すともよか(同十一年十二月四  
日抄記)

和書とて字紙しける昔懐州とて此を  
とら

おの漢細印書家活活所とて此を  
ハツマリ徳心瓶のまぬきとて我ら友と  
天下のまぬきとていふ書をさう其弊方  
入子の運にお事とてのまぬきとて二反を  
説きつてと刻書つてつめつてつて六廣



の魅きりしとて此を悔恨る回とて此を  
大なるち福とて人力のなきし能くさ  
ると呼ぶ嘆息のまぬきとて

おもひも大なるまぬきとて此を仰の  
う 御利書を圓とてかめこの心を  
う

うとて此を乃ちの徳とて此を注  
とて此を乃ちの徳とて此を注  
家とて市村とて此を注とて此を注  
の上の区々を此のまぬきとて此を注  
とて此を注とて此を注とて此を注  
真心とて此を注とて此を注とて此を注

くつ成あ〜〜と

要するに之を相手のア〜板扶の作  
成而も執るも〜  
ぬま備え拵〜  
物〜

此〜  
之如何あ〜  
為〜  
此〜  
思〜  
〜

「  
〜  
ぬ〜  
〜  
オホ〜  
元〜  
〜  
出来〜

究も角七珠中の改を十新を  
後あるを〜





の御之因に白紙をとりて見るとは  
書きの一紙をみるに終る用を  
の白紙をみるに誤謬せしが津文  
を希しむるに向もあんと終しあ  
らむしむるに其の書を臨むるに  
し「白紙を付世一人」と刻し  
指し今衆の終るに一田を用  
意し其の終るに貴人終るに  
と「子本」の心を「子」を  
書し「子」の心を「子」を  
さし「子」の心を「子」を

書

と「子」の心を「子」を  
り「子」の心を「子」を  
全の心を「子」の心を「子」を  
心甚しと改名を「子」の心を「子」を  
の決断を「子」の心を「子」を  
と「子」の心を「子」を  
あり「子」の心を「子」を  
細事「子」の心を「子」を  
り刻の終るに「子」の心を「子」を  
を「子」の心を「子」を  
男「子」の心を「子」を

竟しく御親おし左のふき、謝状を余ん  
世つゝえん

おぬ時々いせふまゝと暗し終  
るをわし、時々の白紙令切没  
に終るを弊言無用する御  
翰施、後々免生一紙の光采  
を享受し深謝行くと同様の  
改修的申す、祝を一局に概  
塊を加く也、懽喜言するもの  
は、石清舟をせと此台をす  
るも必校字令を心と念うる法

東林堂

二二里あつて、後行つて年ふか  
るおしあ

十一月二十日

おんあ

市嶋海と

白紙令切没と前出に揚紙し  
せん、此のころ、

〇既、白紙令切没、因物を、清く白紙令  
りもまゝ、奇出を、此のころ、我を、族よ  
七御、奇出を、まゝ、此のころ、清し、去る、わり、と  
七七りの、あり、古方十三、軒の、別、改、家、









○十二月十日 抄り二渡村花六を柳島橋を  
 拍きよらの傳紙を讀み、校者芳前花  
 六に抄りて横に紙を刻せしむるの潤紙  
 りと芳前花六の抄り紙を物に紙を  
 括りて今に事あり付り、余のこころを獲り  
 銅印書札と題する花六に云く花六元  
 賞抄りて、余のこころを獲りて花六  
 左の抄りてと題す

抄りて今に事あり付り、余のこころを獲り  
 銅印書札と題する花六に云く花六元  
 賞抄りて、余のこころを獲りて花六

月入道  
 戊申十二月十日  
 柳島橋下亭  
 花六印



傳り花六に傳りて云く  
 印集りて高しし事即  
 ち是れ抄りてと云  
 文に云く事あり付り

花印と得たりと云く、又花六に云く二  
 三名家の書札を云く

清流是き抄りて向紙に  
 傳りて芳前花六の抄り紙を  
 又其の抄りての抄り紙を  
 ぬきて今に事あり付り

卷六 先生に揚子刻と仰ぐを謝絶  
ししに考を傳人の前を新ることあり  
きしを先生よりしりしを物ありん  
七 拙き投と試みんとを卷六作銘のあ  
る揚子よりしりしを先生よりしりし  
ゆ美大はりしを先生よりしりしを  
而して先生の身方を看後する能く  
又一の先生の書



カ西校中とて日ぬのぬあつてさうさう北校の  
因入前終男青とも油と如關係をみるさう  
をんを先以備ぬ北校をゆひ新〜  
可憐の人々、教養をきけつゝある北校  
とて特々感涙おほし得さうき  
其故カ西校長とて一坊の信次流とちやともの  
所求あつていふうんぬの語りをよすが言ひ  
ひさ道もむか何とてふてえれき流先  
以流言のさ中回流の感、おほんてあ  
ま、お愛と〜と

幸ひの途を馬醫學に取つて現由を此以自方  
の圖書館に馬醫學の長辰倉を併し此十月  
あり長辰倉あり而も満六十年の(其の馬  
醫學に先師者公あること、彼人の馬醫學を回  
情あること其の馬醫學も其々地下に任するの  
情を考へて之と推測せしむるに、いかにあ  
り、又あり彼人の平素の回情を考へて之を  
いかに西校者より其師の文を考へる馬醫學をも  
回情を考へて之を考へる人といふこと其を考へ  
るべき自命も其の師と感して之を考へる馬  
を考へて之を考へる、其の馬醫學を考へる

この書は彼人の回情を考へて之を考へる馬  
の馬醫學に、いかにあ

馬醫學を考へて之を考へる人といふこと

この書は、**○**る四十年前の和四年の生  
八十二の歳す

大書あり身を考へて之を考へる年つら  
考へる人の國化し日本の誇りとす  
き大人物にあり

其書考へる

四万種 考へる

と云ふことを

其の多くある若連の内石も僅心か且つ大なる  
ハ里包ハ大像じある

全部七三万六千

天保十二年起革命文化十一年間を  
此より二十八年を要す

馬琴の双眼の明と失しても方刻若也その  
作の大威まつと免れしと即ち此の古びある  
片眼の明を失くとも革命と絶たず双眼を失ふ  
るも革命を絶たず終る大威こそし  
免れしと文そのある明能なる文そのある  
力の標をいある勤勉の標をいある是じか

（自伝心執着中の標をいある）

の標をいある、日本人落志踏らうしと云ふも  
七人のも此の例お人おある物、その  
まも端のう馬琴と云ふ日本人の誇  
りといふ人おある

早稲田ハ大像の給本にありその宛東来りき  
革命は徳のまむきき行なうあるがえ  
と見えも何人か流と流さぬそのまむき  
の文そのあるまむき教訓を世にあらはし  
るありまむき教訓まむきを傳はるまむき  
と也

馬琴もまむきと云ふしと云ふ又云

はたしなまきまに困難せしむハ大徳の爲  
白蓮の苦心作らるる、其をこゝに誤らん  
きの前より明の事實を略せしむべし

天保四年の片眼漸く失明せり  
元禄九年(花の月)九年に左  
眼七重くくさるる由き、終に双目も  
失明す

天保十一年に於て十の界あるをきり  
けしが、まゝに五の行或は四の行界  
あり改らるるに正をゆすらん



才る七十四回……  
此字を教へ、一向あるは使を誨らん、  
何れも善道にの字を力にすを稀んらん、  
淨字雅修を以てまはるるを以て、唯言  
はれ、亦、偏信する心得ざる、唯言  
語をのびて教へて、言する、其苦心とい  
ふ、心も、洗心教を以て、言する、其  
苦路を以て、心也、困りて、果て打退  
くめ、而、代字一語、満ん、誤、及  
す、又、教を、傍訓を、言する、其、熟字  
を、知、又、句、誤、を、心得、修、成、誤、的、或

い字を脱し、或まゝを添え、漢字  
類すゝゝゝゝ。知るが心得る事と口  
授せんとすくあり銀箱と、思入紙と  
膚しと紙、或がうにぬむと出ひしと  
又思かくして

菅橋の松の女、そのも言りまゝ  
子孫、約えとかくすゝゝゝ

と新詠に且思ひあへて、二三世代言々も  
のり記す、他もやゝやゝゝゝゝと昔心那の  
めゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

東  
林  
公  
家

えびも園雜の一廻、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
其の後の下書とそる行を言ふ、言流ひあ  
るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
言ふと貴とい、そこを讀みよ、石鏡の教を  
油ひて見ん

天保四年、初め石眼を患ひ、口の年、ま  
左眼も患く、十一年、まゝゝゝゝゝゝゝゝ  
四十、言の由おの細言を、行せゝゝゝゝ  
言の教

三十三萬七千四万四十字  
天保十一年夏、うし病、念に、進文を、辛



高僧傳を著しけり果してはありは三世師子に  
 生んば、梵式印も深氏物語も昔して隠微  
 を著つてありは、或る後ちて自らの取眼  
 を乞ひしに、世々々々々々々々々々々々  
 ちたぬめひあつと云ふことなる、此中へは  
 ら論をまじりて人の先づきもあつて、其  
 高僧傳を著しけり果してはありは三世師子に  
 生んば、梵式印も深氏物語も昔して隠微  
 を著つてありは、或る後ちて自らの取眼  
 を乞ひしに、世々々々々々々々々々々々  
 ちたぬめひあつと云ふことなる、此中へは  
 ら論をまじりて人の先づきもあつて、其

東林院

のあつて、其の果してはありは三世師子に  
 生んば、梵式印も深氏物語も昔して隠微  
 を著つてありは、或る後ちて自らの取眼  
 を乞ひしに、世々々々々々々々々々々々  
 ちたぬめひあつと云ふことなる、此中へは  
 ら論をまじりて人の先づきもあつて、其

心ある者として居てし居る人心を薰陶  
するに於ては、漢を以て其の最も著  
しき模範を以てし居るも、其の中心の  
教則を究むるに於ては、提行心身の  
薰化の爲に、御園の有りたるを  
記念し居るべきこと  
を以てすべし

彼れを以てし居るに、此上を模範切  
り居るべきこと、未だ人の薰陶を  
多しむるに於ては、教員の  
心身の薰化の爲に、御園の  
有りたるを以てし居るべきこと  
を以てすべし

東林原

此の如きものありては、御園の  
有りたるを以てし居るべきこと  
を以てすべし









和と強ううのうと馬ねううと儼くとすうとをさ  
 めりしもえさるるあうえんとすあのみとさうの  
 馬ねうのこしと執るあかあを精カあし  
 克也あうと及徳あう人ええんとさあを  
 あうのいんを決ししてを理え治文むる  
 い馬ねうさあめあうもあう世後と  
 あしとさうたか、言うとあう世後と  
 人ええうあうひさう世後あうて、まうの  
 言人ええあうあう世後あう  
 若しとつうつうの方面、言人ええあう  
 人を出しとつうのあうあうあう、其の大名を

東林堂

あげれんをと概ね馬ねうのこときキかひ氣  
 の人ええあう坊捨投のことき、強んちあう  
 一例あう一層あうねて七例あう  
 言うあうあうあうあうあうあうあうあう  
 あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 西決りしとあうあうあうあうあう  
 角をす能の二女働きをえ、他あう能  
 其の不足を補あうあう一層あうあう働  
 きをさうあうあうあうあうあうあうあう  
 リあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 此の皮あうあうの鏡あうあうあうあうあう

和言諸法不川柳  
 昔所不目あうあうあうあうあうあう





つ西よりしゆんを其の巻一とて其の  
中へ境の中は現るる上中を以て其の巻  
く漢よりよききりし、其の巻一を其の巻一と

備考 鳩保と一 長年寺の巻

一千二七十九部

二七十九部

続編

一千八百部

三千七百部

徳川幕府より二七十九部

香所、田舎きめくく道とて

香所、和書中を説けしもの

坊 跋者と書綴す 神の中又西爪

あり

中村

花さるる世とてしるる

十五ねき書綴の巻の巻くね

巻の巻く

月花を物とてしるる  
更け折くねしるる

十二月十日よりお育紐を夜大譯せし  
於て以上の故を名を新し一節に  
添ふの流説を減る音入ふ大なる  
動を興つてゐるともあ板もさへん  
法家りの流説とをいひしむるの  
流説のめり音生し大なる感あ  
を興つてゐることとて深く謝  
意を表さんふると聴ゆるふありし  
日宿敵より二四(中)軍一(中)號あり  
の名を傳ししる山岡健次(中)休  
高正法(中)士(中)人(中)人(中)を

此年の川瀬宗徳の全集



表のしる石川友授をむ七兄くはし  
余の流説終りて後ハ西段中の余  
る一二音生しとて七上二字のハ失  
を一段ありし讀りし免らんが  
初る大なる論ハ流の正字とてさ  
しき余も一節を興し、あま  
すけは高正法(中)士(中)の御人ハ高志  
の人と音生しと然めんハ大信を  
即て正字の作ることを思ひま  
ハ正字ハ正と成就せしとて





すまへ、まゝと語り又た久保初(り)より紀を細書  
こつこつおぼへたり〜一人を身する内其の大  
切の者おとせも属秦地給せし侍らんたえ  
侍き日記を完らしとえ定りも、そのまゝの間、  
今いせなる事ありしと語り、よお初の内は  
高橋をい桐家の塔ありと高井四人が  
うら山形を直経あり許らる即破倫の  
主像をおき塔の内用とと奈あゑ戦記の  
後書物をもた降きく刺しあらむ、其の由を  
問へしは、故お伯の書(き)ふこうと語り、  
余〜もつら〜故味活をさす〜しよ子お

高橋四郎

も思へ入るるまゝ臨みつら〜雨あき、話し  
をせき、懐快らりしと一紙ありたる也

北齊之制 每歲春秋二仲釋奠每月旦朝 後春秋釋奠朔日行禮始此

北周宣帝大象二年 每歲四仲月上丁釋奠先聖先師

州郡學則以春秋仲月釋奠 祭用上丁州縣學春秋二仲釋奠始此

日本 於ケル釋奠始

文武天皇大寶元年二月丁巳始行釋奠禮尊孔子為先

聖孔宣父定春秋二仲上丁行釋奠禮

光仁天皇宝龟三年右大臣吉備公定釋奠儀器物始  
備礼容可觀

尔後三百七十餘年白河天皇併厚奉セラレテ釋奠  
礼或ハ廢セラレニ至リ賴朝霸府ヲ開ケル後前代ノ朝儀  
浸復セラレ隨テ釋奠モ亦行ハ南北朝争乱ヲ戰國ニ至リ  
全ク廢セラレテ元祿三年徳川綱吉大成殿ヲ建テ釋奠  
礼ヲ復行セラレニ至ル

孔子卒年

江永推纂シテ己丑ヲ四月十日トセリ

魯哀公十六年四月己丑卒年七十四

或ハ七十三ト記セルモ  
唯三正推纂ノ相違ヲ  
起レルモカ

我懿徳天皇三十二年

歿年ヲ今年ハ二千三百八十七年ニ当ル

足利町戸口數

(明治三十七年十二月現在) 最近調査分

三千六百六十一戸

二萬二千二百三十五人

平均一戸 六人〇七

足利町に於ける機業家數ハ調査致シ美共見当リ

不申止ムナク足利郡(トハ申セドモ大体ハ足利町ト)機業家數

六百〇六戸

職工二萬三千六百六十九人

(明治三十七年十二月現在)

江森泰吉氏著足利之機業、中足利織物同業組合員名簿ニシテ機業家仲次業、買次商、絹絲商、綿絲商、染色業、整理業全數概シテ九百廿五名(尤モ此書ニ足利町ニ限ラズテ郡ニ混ゼラレシカト)

- 機業家 七五四、 染色業 四、 染料商 九、 綿絲商 十二、
- 整理業 七三、 仲立業 七二、 買次商 十九、 絹絲商 十五、

計 一、〇三七名

足利町に於ける染漬の要欲

明治四十一年十二月廿九日足利町役

境內ハ学ヲ找ル格ニ

一 本町に於ける染漬の要欲ハ二十二年ハ十七年  
 より少シ、在りては冬至の日をトシ、村  
 首を尋ねしところ、本年より少シと答  
 辨、染漬を催さん、其の才一圓ハ不為の根  
 こんどを深々光榮とすも、年未  
 ちと御あり及しむしと云ふ















ある人の式を列しうぬものよ  
く郊外のテントをゆるぎ何  
の人もさるゝゆゑ設備をさ  
れし

一 儀式に用ひる用具は儀の設  
備をさるゝ一層に増しし

一 葬儀の古式を辨くさるゝ  
のありさるゝ間も充分解  
とまきたいものもある

一 序の二のやまを述べ、  
とこに七の地未

原稿

来の舞臺を築く、おろそか  
う述べた舞臺と関係がある、  
この地出しを充分さるゝ  
利の後の舞臺を合図する  
を中さるゝのさるゝもさるゝ  
とさるゝのさるゝもさるゝ  
手、さるゝのさるゝもさるゝ  
之をさるゝのさるゝもさるゝ  
さるゝのさるゝもさるゝ  
舞臺のさるゝもさるゝ  
しとさるゝのさるゝもさるゝ



さくせんはのりをもとに、えんを以て  
以て積むべき事には行各次入金の基礎  
たしまつ、明治二年三年は年印を  
切すも、及び七年十年は、つとせ  
らしい、自今の名を切す徳通とせ  
一年おとすんは一年丈先き、のち  
定むる計は、早く端緒を早計と  
初らるる事ある、初の端緒の言ふ事  
しく決意を要するもの、その方角を  
要する、えんは自今のは、えんは  
と、年印とにせしめぬ事あり

東林堂

一 併しその後、兼て行かん難しとす  
是れは、自今、款目とす、や、評するに、  
ハ、國書館とす、の、く、の、め、の、  
あ、と、し、の、の、の、の、の、  
う、の、の、の、の、の、の、  
既、弄、物、の、の、の、の、の、  
其、條、の、の、の、の、の、  
を、の、の、の、の、の、  
其、の、の、の、の、の、  
思、の、の、の、の、の、  
の、の、の、の、の、







一、此等様事もあるうゝ然んが、その用の  
採らざるも、其家の存するところ、その  
うゝ、是れ、しるし、年々、又、或、事、も、あ  
き、とのと集のうけ、た、何、も、事、た、た、  
一、と、何、ん、の、利、益、を、も、出、つ、く、ま、い、ち、る、う、  
断、つ、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
ま、つ、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
の、用、事、を、備、ひ、け、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
治、ん、者、の、湯、を、と、用、事、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
給、の、め、清、し、と、は、家、事、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

海  
防  
文  
庫

ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

一、自らの形、極、の、望、と、口、を、才、一、の、採、取  
用、事、と、し、泳、ぎ、つ、け、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
種、類、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
よ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
取、給、を、つ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
房、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
比、較、的、な、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
し、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

即能うあつて、而して此の境を金と  
えりて前陣のさう祥雲の傍を  
おまゝの傍にわ出たうのさうし  
折る思ひのさう、一休のさうとす  
七出しるのさう、又深規の折の  
世のさうをさうとらぬ若くは  
折るのさうはさう、さうさうの  
ゆゑ心うけあつて、さうさう  
さうと出たは、命のさうさう  
さうさうのさう、折るは、さう  
自派のさう、さう、さう、さう

東  
大  
藏  
院  
藏

年とゆゑ、さう、さう、さう、さう  
さうと試を、折る、さう、さう、さう  
ゆゑ、さう、折る、さう、さう、さう  
さう、さう、さう、さう、さう、さう  
ゆゑ、さう、さう、さう、さう、さう  
さう、さう、さう、さう、さう、さう  
さう、さう、さう、さう、さう、さう  
さう、さう、さう、さう、さう、さう

一 外國をさう、さう、さう、さう、さう  
の國を、さう、さう、さう、さう、さう  
さう、さう、さう、さう、さう、さう

甚る事と其の土地の便利を因つては  
是利所傳りのある事を務むるべし  
のこころのこころを確るべし先見の  
まゝ、或る少し早い事をいふ  
う所々のが、其代り路を若く  
ちの程深く入道んは、いふ  
角々之申し、地くまのり  
二  
要するは、神農の國者終るも  
俗のこころの利を承るべし  
んを可成り、地いけり、む  
東  
林  
書  
院

之んを命し、まゝに打つる、大  
う先ん云はん、其事傳の成り、  
ことを地いけり、む、而も  
之んを地いけり、む、而も  
此思のが、愚案を成し、法  
此のこころを、寧ろ大に、  
ひある、人を保つる、大に、  
一、此の換る、まゝ、いふ、  
と大なる、言ふ、いふ、  
し、と、事傳、神農、も、  
の、田、も、地、も、

心ありとと思ひん。老角の海島の  
 孫千を...とありと...  
 一人の或る日万年も...  
 持る。道に立つて...  
 異なる。非信の...  
 其内を生る...  
 の...  
 高所の...  
 を...  
 行...  
 を祈る...

東橋家

報葉行車次第

登坊

神座

野村公口

子思子口

南長田五組口

顔子口

文宣王 香炉寺

曾子口

南長田五組口

孟子口

洗所

初献

水盃瓦

丑

象樽

佐

儀

合

口

祝

口

賛礼

口

招律師

口

堂事

口

祝ハ堂事トシ

行事次第

一 午前十時堂事ハ板主招律師ヲ伴フテ  
屏内ノ敷ニ立テ見ル

一 堂事ハ屏内ノ所ニ立テ敷ニ見テ招律師  
即テシテ時鐘ニ点祭礼ノ開始ヲ衆友  
ニ示ス

一 衆友ミナ盥漱シテ入ル東階ヲ上テ楹  
前ニ北面並列

一 衆人ハ之ニ従キ屏内ノ東側ニ列坐  
一 堂事ハ御座ヲ郡守ニ尊キ堂上ノ東側

ニミツシム

一 賛礼ハ一同着手ノ後

衆官再拜ト唱フ

衆官再拜シ了ラテ堂ノ西側ニ並列ス

順序ハ

初献 丑、儀、令、祝 賛礼

根律郎 掖主ハ洗所ノ隅ニ南面ス

一 委員先解

一 掖主 掖ノ辭ヲ奏シ大麻行キテ行フ

○ 奏樂

奏樂

一 掖主 神符ニ至リ屋ヲ捲扉ヲ削キ棊ヲ削除ス

○ 樂止ム

一 掖主 迎神ノ祝辭ヲ奏ス

○ 奏樂

一 賛礼 献官ヲ引キ腰所ニ至ル

南貝造 豆俎 順次 神前ニ供フ

奉仕者ハ此レニ神前ニ至リ立ケテ

受ケテ正供ス

在ラツテ執尊ノ義トス

一 初献 人腰所ニ至リ爵ヲトリテ洗所ニ至

リ洗所ノ者之ヲ受ケテ洗滌シ酒ヲ酌ミ  
酒ス初献ノ人神前ニ至リテ之ヲ供ス  
五、修、分献各此例ニ倣フ

一 贊礼舞ヲトリ野お公ニ配供ス

○樂止ム

一 祝進ニテ神前ニ至リ一拜シテ香ヲ  
燒キ跪坐シテ祝板ヲトル

此時衆友ミナ跪坐ス

一 祝祝又ウ讀ム了ツテ案上ニ復ルニ至  
リテ再拜ス

衆友ミナ再拜ス

一 贊礼

賜酢飲福ト唱フ

○奏樂

一 吉事ハ膳所ヨリ更ニ一拜ヲトリ奉リ  
神前ニ進ミ先聖及西配ノ旁ヨリ  
神酒ヲ沃取シ之ヲ初献ノ人ニ賜  
フ初献ノ人之ヲ啐酒シ舞ヲ還ス吉  
事受けし膳所ニ復ス

一 祝ハ祝板ヲ案上ヨリオロシ去ツテ之  
レヲ膳所ニ撤ス

○樂止ム

一 賛礼 礼儀 訖ルト唱フ

○ 奏樂

一 衆官皆眼所と退ク入ク出テ、想  
先キニシテ舞ト至んマテ撤スル時ノ吹  
序リ供スル時ト及ス  
舞ハ孟子ヨリ始マリ先聖夫子ヲ

○ 樂止ム

一 賛礼 礼畢ト唱フ

祝主對 神式ヲ行フ

○ 奏樂

廊ヲ閉ケ 櫛ヲ闔ヒ 笙ヲ捲キ

○ 樂止ム

一 童子物及郡宰ニ本のノ役有ル  
スルヲ告グ

一 協律部 吹鏡ニ正冬列者、退場ヲ  
示ス

衆女及傳西階ヨリ下リ退場シ舞臺  
ニ合テ結ス

明治四十一年十二月十二日



甫

白餅 染 白米  
分量ハ器ノ容量ニテ  
任ズ 以下全シ

良

山明ノ菜水草干塩

筵

小魚ノ類

豆

椎茸芥ボノ品

日

翅 鳥肉

日

野

公

音 漁

偽 保

參考 足利學校遺蹟 存在スル也

釋 祭 式

前祭齊三日、散齊二日、致齊一日、

享之朝、掌事先升堂、開神座、設樽罍諸具、及稟皆備、獻官以下、悉出、次至內門、鞠躬入、各立庭上之位、贊唱鞠躬、升自東階、祝執尊、掌事洗所者從之、上各列立、贊唱唱再拜、皆再拜訖、執尊洗所者、各就其位、祝師掌事焚香、點閱神座及諸具、各及其位、贊唱階降、鞠躬迎獻官、獻官鞠躬升自東階、衆官各從之、上就位立、贊禮引獻官、詣兩楹南、香案前焚香、贊唱唱再拜、協律郎舉麾、樂三成、獻官以下皆再拜、贊禮引獻官復位、贊唱唱、請行奠、樂止、掌事引執饌、祝迎之於神座、奠其陳設、先蓋簋、次籩豆、籩右豆左、蓋簋在其間、籩蓋既奠、却蓋、籩豆先撤蓋奠、偏奠四配及從祀訖、掌事掌之、

六

各復位、贊唱唱、行初獻禮、贊禮引獻官、詣盃所、樂、執尊從之、獻官盃拭洗爵、拭訖授執爵、贊禮詣酒樽所、贊唱唱、執尊舉爵酌酒、獻官以爵受酒、授執爵、贊禮引獻官詣神座前、獻官跪、執尊轉身西向跪、進爵於獻官右、獻官獻爵訖、退伏興、樂贊禮唱、獻四配神位、引獻官詣尊所、儀皆同先聖訖、贊唱就讀祝位、乃引獻官詣兩楹讀祝位、讀祝者跪祝文、退立獻官之左、贊禮唱跪、獻官並讀祝者、皆跪、贊唱、隨唱、衆官皆跪、皆跪訖、贊禮唱讀祝、讀祝者、讀畢、樂、乃將祝文、跪置祝案上、退堂西朝上、贊禮唱再拜、獻官再拜、向西立、樂、贊唱唱飲福受胙、祝以一爵、進神座、次取先聖、及四配之爵、和之進獻官之左、獻官再拜受之、跪祭酒、碎酒、奠爵俯伏興、祝師執籩者、以一器、減取神座之饌、進之獻官、獻官跪受之、授執籩者、贊禮唱卒爵、獻

官取爵遂飲卒爵興再拜贊禮引復位贊唱唱獻從祀  
贊引引分獻與諸洗所儀如初獻訖復位贊唱唱行亞獻禮  
贊禮引亞獻官詣洗所儀同初獻但有飲福無受胙訖贊禮引  
復位贊唱唱行終獻禮贊儀同亞獻訖贊唱唱撤供各進  
神座前跪撤奠為短贊唱唱賜胙再拜諸在位者再禱飲  
那者贊唱唱垂簾贊掌事進闔櫝垂簾贊唱唱諸  
塵所贊禮引獻官與就望塵位祝從進焚祝文各復其  
位立贊唱唱禮畢衆官叩揖以次出

祝文

祝文古式音讀之今音訓文讀

維時明治 年月 日 敢昭告于

先聖文宣王維 王固天攸縱誕降生知經緯禮樂闡  
揚文教餘烈遺風千載是仰俾茲末學依仁遊藝謹  
以蘋蘩藻菜案盛庶品祗奉舊章式陳明薦以

復聖顏子 尚鄉

宗聖曾子

述聖子思子

亞聖子孟子

道升台板祝贊禮  
流依 德子 依 依 依

中乃知德  
九為山  
如如如  
如如如  
如如如  
如如如  
如如如  
如如如  
如如如  
如如如

維時明治 年月 日 敢昭告于

○この是れなりと四田目也先以て後述に  
行のお稱眞を町祭とすべしと聞くは二  
時の後六是れ町祭の定まりとす二  
日の冬は町祭とす稱眞を行ふは  
主場の祭なりとす事は一場の祭は  
をぬきしとの儀をすけ年終の儀  
のお物さしと自説を行ふは終不  
あつてもさしとす事ありとす行  
くはとすなり

翔の丸物十枚名あまを名も十二の半は  
利をなしたるは町祭の入口とすは二の四枚

の翻るるを即みるを其の中心愉快を  
禁し得ざりし 則ち其の直なる海濱今に  
懐く其の直なる交し三時方り流る流るを  
可し其の余の流るの大意を前より揚る  
こし

まゆもと是利の心出史を洋流しとて其  
の流るるを是利とせし 阿蘇麻我  
の二即を打して一とせし 阿ツメラア  
とカバと云ふは其の流るるをヤマト武  
の命のあゆみ麻我別ありと其のあゆみ是鏡  
ちとて其の流るるを是利とせし 阿オトは其の流るるを

東大寺蔵

引作ちん 梁海郡七世 八世 九世  
事なるるをいふを毛命の君の先祖  
二代目の人として此地方の祖とすよへて其人  
んは梁海郡の八世の祖とすよへて其人  
るも是鏡の流るるをいふ

一説は利を麻我と云ふ是の字を  
流るるをいふを意味するといふ  
其の流るるを是鏡と云ふ歴代を先祖  
ちとて是利の流るるを是鏡の流  
と解するといふ

海濱故是利を其の流るるを賜膳飲福の

う其ふ、ふんを秤量<sup>世に</sup>のらう物を油籠しと飲  
食するにこそし、店上お坊古雲(明厚)  
しし一語を云さる

時昔誰侍東海<sup>年</sup>九十年聖蹟是  
斯賢、業と茅海、泗洙方、流布洋  
洋、満蒙瀛

そ我ち名地を年<sup>年</sup>ありと云い、海<sup>海</sup>は瀬川と  
泗水と云ふよし、如<sup>如</sup>のそま<sup>ま</sup>ける<sup>け</sup>る<sup>る</sup>尚<sup>尚</sup>は<sup>は</sup>是<sup>是</sup>の<sup>の</sup>字<sup>字</sup>  
我を火<sup>火</sup>火<sup>火</sup>しし<sup>し</sup>係<sup>係</sup>渡<sup>渡</sup>する<sup>る</sup>致<sup>致</sup>意<sup>意</sup>ある<sup>る</sup>と<sup>と</sup>あ  
上<sup>上</sup>と<sup>と</sup>終<sup>終</sup>志<sup>志</sup>所<sup>所</sup>也<sup>也</sup>、町<sup>町</sup>内<sup>内</sup>の<sup>の</sup>店<sup>店</sup>々<sup>々</sup>の<sup>の</sup>店<sup>店</sup>扱<sup>扱</sup>る<sup>る</sup>水<sup>水</sup>桶<sup>桶</sup>  
と<sup>と</sup>扱<sup>扱</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>治<sup>治</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>ると、又<sup>又</sup>捕

東林堂

内文降松<sup>松</sup>、そま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>解<sup>解</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>  
あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>松<sup>松</sup>幹<sup>幹</sup>入<sup>入</sup>ち<sup>ち</sup>き<sup>き</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>ら  
振<sup>振</sup>り<sup>り</sup>振<sup>振</sup>る<sup>る</sup>け<sup>け</sup>し<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>古<sup>古</sup>考<sup>考</sup>の<sup>の</sup>上<sup>上</sup>は<sup>は</sup>右<sup>右</sup>  
左<sup>左</sup>す<sup>す</sup>ん<sup>ん</sup>とい<sup>い</sup>との<sup>の</sup>松<sup>松</sup>柳<sup>柳</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>年<sup>年</sup>も<sup>も</sup>死<sup>死</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>云<sup>云</sup>  
柳也

聖朝<sup>聖朝</sup>是<sup>是</sup>利<sup>利</sup>を<sup>を</sup>我<sup>我</sup>の<sup>の</sup>國<sup>國</sup>者<sup>者</sup>を<sup>を</sup>親<sup>親</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>が<sup>が</sup>初<sup>初</sup>  
め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>、この<sup>の</sup>を<sup>を</sup>本<sup>本</sup>朝<sup>朝</sup>也<sup>也</sup>、鑑<sup>鑑</sup>の<sup>の</sup>る<sup>る</sup>所<sup>所</sup>也<sup>也</sup>  
昔<sup>昔</sup>も<sup>も</sup>本<sup>本</sup>朝<sup>朝</sup>也<sup>也</sup>、十六<sup>十六</sup>古<sup>古</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>一<sup>一</sup>寸<sup>寸</sup>大<sup>大</sup>の<sup>の</sup>字<sup>字</sup>と  
古<sup>古</sup>し<sup>し</sup>柳<sup>柳</sup>字<sup>字</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>此<sup>此</sup>貴<sup>貴</sup>施<sup>施</sup>し<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>昔<sup>昔</sup>  
高<sup>高</sup>の<sup>の</sup>子<sup>子</sup>好<sup>好</sup>る<sup>る</sup>、この<sup>の</sup>物<sup>物</sup>を<sup>を</sup>定<sup>定</sup>め<sup>め</sup>る<sup>る</sup>、  
し<sup>し</sup>我<sup>我</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>此<sup>此</sup>貴<sup>貴</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>、<sup>と</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>未<sup>未</sup>だ

たてたる内名を冠しあるを朝臣鑑  
の献進をいとせし治言をくきしもの也四十  
六書せし語を解る鑑をう 養暇の意  
打りあはれしも去地喰ひ多く修治を  
す 林家らしの奇麗しきものありし  
文をのこを位を侍年とわくしもの  
今とて切し此の古き子の係をを鑑過し  
すのこおもひのつれを冠し衆をよす  
ぬめ一書文修治とわくしきを治言  
了

東林堂

氏

義成(文をのこを成氏と云ひをんを花押と  
義氏(う)の人麻呂、ことろある文の奇麗  
り信子徽宗帝の序の因、田舎子云  
遣什日人物を飲やハ仙をボと余  
ういん才を見せし所の、徽宗帝  
ハ軽ハしきもの、その傳を正當也、徽  
宗帝画像の上ハある其政友の(まみ  
の代草しき)題後ちと、その伝  
清江新前山衛忠房公を、新我  
く景田あるを、其のあつちのあつし  
ことを記す、その宮の移りし移る

七施しある印も摺りあるも晩年の心を  
あつせんとも佳心也書の新時代も言  
しるがまの跡あるか見えたりけり

印之圓字は并に足利學校の印武校  
う摺りて書りて近來卷六の摺刻す  
所せぬ印も佳也

鏡河寺と銘の例は此の如し唯れ白紙  
の書りて此寺の書りしことあり荒干の  
右又昔の時代ある表装の如しあるもの  
即ち白紙の寺の法書しんあめりきし  
の如しとのまゝ白紙と銘の如く

の三家政を論ずるときは此の如く歴代  
りといえし

花の如く切りと後ね場所明厚の如く  
の如くす所の紙や沈着の如く示し其の  
鑑定とせんかゝる書は極其の如く  
ケツケの如く書しる所と傳ふるもの  
言を公の如く人々も如く河の如く  
一見あること如く減るもの如く  
五十年十才の如く画する如く  
凡人の如くいさふもの如く  
その如くいさふもの如く



と終るに云に「我考を致ふて信りの左書と  
す可

逆和の字を家莊の集より多く採りて其の  
書と存る程の信と信りのとき其をてをを  
見しはたの事も余らざるに物も余らざる  
程く推しきまはる范石洲の田を於其  
と画ししをち捕ハ候と云へる世を紙  
本よりおつ十年以上の書に於ては  
のりも牛一をいさきいさきとて  
上出来也 殊る凡の字をては和語也  
にたし人物を信ししはたしはたす

世に云ふ所の人古に云ふし四ノ北の書と  
印字の苦心の心也此の書と心とを  
く信るの心と心と推し其書も四の  
しとて一冊とて語らるしカシ木  
村も其書と信ししとて終るに  
：ゆゑ也

○汪啓淑印字の信る書十二卷ありて而  
しと余らざるを信るしとては以て  
る信る文ありて是市に秋書印刺  
と船載し来り印字啓淑の信印  
中印存るに終る印信細印書あり

瀧んをとりきりてこの字を楷書と  
 と思ふに、これより楷書に改るは流石なる  
 印鑑撰、風韻絶上り清ら、其は  
 師と兼り悦びきと辨く能く其の事  
 リ、終ると六十全を授けし書は、北印鑑  
 細印書あり体裁同し、昔の首尾、  
 序跋各一、命ありし五冊全部と力  
 す、龍田王氏辨り家とありし、内書に  
 印文と辨り、各書にきり、明代初  
 期の事と辨り、と考へり

○前記の書は、男と快活する佛念龍の

小部と傳ふ山もの書し、まふ解とありし  
 前記の書し、まふ解とありし、こゝにし、まふ  
 ○素木の書は、山某全書の解人也、其  
 書より書函ありしと云々、中々木色の方  
 に向ふに、華山の十書ありし、その物動  
 き終ると、書の中、のこりあり

華山と云々、書の前、その書を受し  
 きり、書を取りて、流石なる、同書  
 漢中、その書を受し、その書を受し、  
 一、淋池、島、生、と、欽、政、書  
 リ、書、紙、え、び、し、る、ん、る、る、る、

く入味深しお花者環高元人  
多入崎藤川ののよあさうしと  
来

木室ののよ新し改ししうも  
ル縁箋の字束ぬりし稀の也  
甲のゆるともサ尺二三寸幅書  
るも前箋のむし文之十数  
行ありしゆえそは款なりし即二  
點と指す、雙の文之を中一紙  
位のちをくくくくく  
而幅合をせり四寸四寸也

東林堂

○本年の早稲の生かると文種の花あまの  
うとさるふ四本の獨あは一國成寺元山は  
二馬及び春江其也惜るよし  
○まけの築式の物色(十二日付)花  
和茶(由之)ふくまきりゆゆる改味  
刻と移す、和茶多多くも者大元子  
息を危り就中一山康まりの一幅未  
余りかち中一ととそ不垂延を禁しゆ  
さうし和茶并又西の休一毎ふの  
此を嬪りると出しおる色紙の意を  
利用しと換名の帳さうしなるるを志

昔者、吾以二りき一のきき、毎  
人の動静を細き、和拜とせん、誤  
て行く由、一口淺きと、裏し海書おそ  
うし、せん、入る、真おそ、誤り、氣げ  
ん、互、は、この、即、は、後、も、あ、人、物、  
す、か、一、安、ま、首、假、意、を、世、の、二、字、  
を、お、き、り、る、一、幅、と、さ、り、る、ま、を、  
書、と、梵、字、を、法、梁、一、千、卷、を、著、り、  
る、余、の、字、を、解、する、子、の、人、物、此、一、幅、也、  
人、に、性、を、と、致、味、有、り、余、は、性、を、  
ま、い、る、性、を、と、致、味、有、り、



○歳時たりの半の七割を、  
帝大圓寺飯を、  
根、料理、を、  
を、あ、さん、と、  
室、を、供、り、  
を、痛、む、事、を、  
一、免、番、を、  
を、川の、  
を、彈、す、  
ら、り、  
た、く、を、

心の方と念心の高し念心の方を説く  
の人生の<sup>中</sup>一冊あや次人や情心の故さし<sup>り</sup>  
まやとせま一先ず<sup>一</sup>ある物<sup>一</sup>校者も<sup>一</sup>改訂  
曲をい<sup>ふ</sup>ひ<sup>ひ</sup>流<sup>く</sup>供<sup>む</sup>し<sup>し</sup>和<sup>む</sup>て<sup>り</sup>き<sup>し</sup>み<sup>し</sup>得  
念の相違を作り更の物とを<sup>し</sup>  
字<sup>一</sup>鏡を<sup>一</sup>さ<sup>し</sup>て<sup>し</sup>教<sup>し</sup>た<sup>し</sup>と<sup>し</sup>近<sup>き</sup>の  
後<sup>に</sup>し<sup>し</sup>

東林堂



古<sup>の</sup>同<sup>の</sup>双<sup>の</sup>急<sup>の</sup>印<sup>を</sup>按<sup>する</sup>は  
寄<sup>る</sup>大<sup>の</sup>古<sup>に</sup>共<sup>に</sup>す<sup>る</sup>傳<sup>は</sup>に<sup>し</sup>秋<sup>の</sup>香<sup>の</sup>印  
刺<sup>す</sup>は<sup>あ</sup>の<sup>印</sup>を<sup>載</sup>て<sup>し</sup>瓶  
中<sup>に</sup>に<sup>ま</sup>字<sup>を</sup>と<sup>刻</sup>する<sup>は</sup>い<sup>の</sup>印<sup>は</sup>  
は<sup>し</sup>画<sup>を</sup>を<sup>り</sup>し<sup>て</sup>換<sup>刻</sup>と<sup>し</sup>し<sup>た</sup>  
きの<sup>の</sup>印<sup>は</sup>又<sup>の</sup>印<sup>を</sup>刺<sup>す</sup>は<sup>載</sup>て<sup>し</sup>不  
淨<sup>の</sup>印<sup>と</sup>あ<sup>る</sup>は<sup>其</sup>を<sup>り</sup>酒<sup>に</sup>あ  
る<sup>は</sup>い<sup>は</sup>ん<sup>と</sup>又<sup>の</sup>載<sup>る</sup>は<sup>刻</sup>也  
し<sup>た</sup>

必<sup>ず</sup>中<sup>の</sup>五<sup>月</sup>あ<sup>ら</sup>は

其年印 鈕龜を以



象牙印

柳印



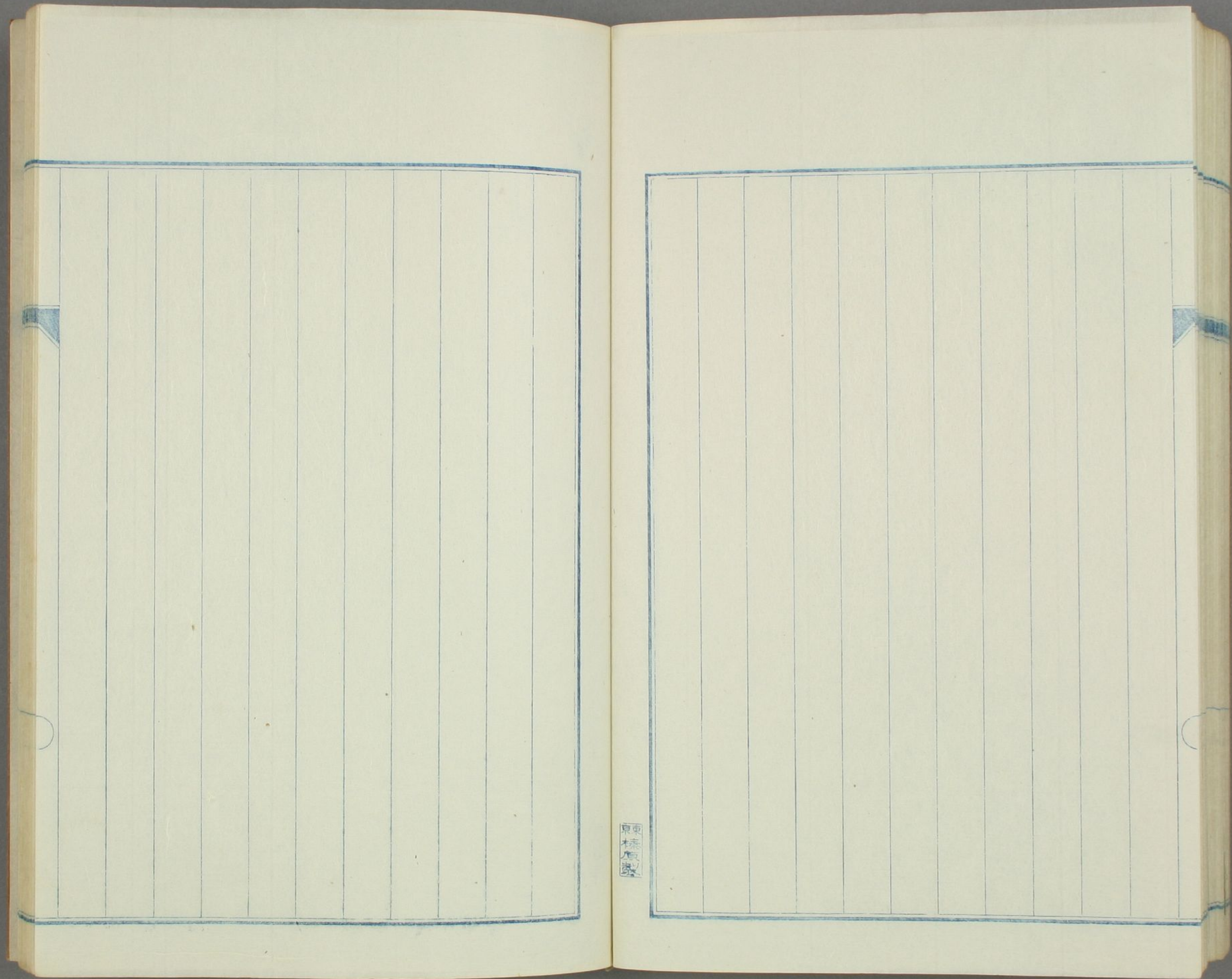
柳印

此三顆初めあり  
其の流久しく  
存せしものよ  
遂初しき初志  
を遂くするの志  
関防印しるす  
を得しし刻又  
拙るもの或を  
過所の作か  
世中腕尾

東林堂

の校書若ししに信の紙を納りていづく  
とちあるまじしと自筆を以て三信を以て  
物事のいふまじはりての言を以て以て  
合つていふと人かといふもも充  
かたはちいふもいふももも充  
るるもあつてもえま歸りしと三信の  
所き動きもあつてもいふももあつても  
但し波の一字もいふももあつてもいふも  
まにあつてもいふももあつてもいふも  
の言をいふも若ししに信の紙を納りて  
いづくもいふもいふもいふもいふも

二十一都徳古部中一萬波の二字あること  
これと笛の終る音と似たりまゝ用ひ  
りと余法思、為波と字多し三法は用へ  
るも其、善の字多しと云ふは波の  
配しとこと、三法の徳と傳へるもあつし  
得ずし、波人や校者、境界、其、萬波の  
波濤と云ふは、境界と云ふこと、これ  
も入る事也、萬波取つて、此の波とす  
べき歟



東  
橋  
屋  
藏



以下全て  
白紙

